「雨ニモマケズ」を読む

浅野幸治

「雨ニモマケズ」は、宮澤賢治の有名な詩です。実は、この詩には題名がありません。題名がないので、冒頭の句をもって題名の代わりにしています。題名がないからといって、「無題」とするわけにもいきません。「雑感」とするわけにもいきません。むしろ、「雨ニモマケズ」という冒頭の句から、すでに力強くこの詩は始まっています。いきなり詩の中に引き入れられるわけです。この冒頭はあまりにも有名なので、誰でも

雨ニモマケズ

と来れば次に

風ニモマケズ

とくることを知っているでしょう。3行目は覚えていますか。

雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ

です。雨や風や雪のことを英語で、elements といいます。「自然の要素」という意味です。そういう自然の脅威から身を守るために、人間は服を着たり、家の中に住んだりします。けれども、そういう対策は完全ではありません。完全であったなら、日本語では「温室育ち」と呼ばれるでしょう。そうではなくて賢治は、そういう自然の要素に「マケズ」「マケズ」「マケヌ」というのです。よほど強調したかったのでしょう。そのことの意味は、次の4行目になって明らかになります。

丈夫ナカラダヲモチ

これを言いたかったのです。

賢治の妹トシは、1922年（大正11年）に24歳で亡くなりました。そのとき賢治は26歳でした。賢治自身が亡くなるのは、1933年（昭和8年）、37歳のときです。私たちの感覚からすると、あまりにも短い人生です。「丈夫ナカラダヲモチ」を読むとき、トシのことを思わないではいられません。現実には丈夫な身体をもっていなかったからトシは亡くなってしまったのです。その現実に対して、「丈夫ナカラダヲモチ」というのは非現実の願望というか、祈りです。この詩全体が祈りであることは最後の行になって明らかになります。「丈夫ナカラダヲモチ」というのは妹トシのことだけではありません。賢治がこの詩を書いた1931年（昭和6年）、賢治はすでに自分の死を覚悟していたので、自分のことでもあります。

続きを読みましょう。

慾ハナク

決シテ瞋ラズ

イツモシヅカニワラッテキル

「慾ハナク」と「決シテ瞋ラズ」の間には因果関係があります。つまり、欲がないから怒らないのです。怒らないので、その結果どうしているかと言えば、「イツモシヅカニワラッテキル」のです。この「ワラッテキル」はお笑いや爆笑ではありません。「イツモシヅカニ」ですから、心の安定を表しています。機嫌が良いとか、幸せそうにしているとかいった感じでしょう。修道院では、こういう笑顔に出会えるかもしれません。「キル」は終止形なので、この詩は、ここで一旦止まります。あとの部分は、「慾ハナク」から「ワラッテキル」までの3行の展開ないし説明と言ってよいでしょう。

一日ニ玄米四合ト

味噌ト少シノ野菜ヲタベ

この2行は、「慾ハナク」の具体化です。つまり、これ以上の贅沢は人間に必要なということなのです。

アラユルコトヲ

ジブンヲカンジョウニ入レズニ

これは「慾ハナク」の解説です。欲がないというのは、自分を勘定に入れないということです。キリスト教的に言えば、自分の利益ではなしに神様の御心が行われますように、ということです。

ヨクミキキシワカリ

ソシテワスレズ

最初の4行は身体のこと書いてありましたが、ここでは精神のことが書いてあります。「ヨクミキキシワカリ」というのは、独断や先入観で判断するのではなく、精神が客観的世界に開かれているということです。「ソシテワスレズ」は、精神が聡明だということです。ちょうど理想の身体が丈夫であったように、精神も聡明であるのが理想なわけです。

野原ノ松ノ林ノ蔭ノ

小サナ萱ブキノ小屋ニキテ

これも「慾ハナク」の具体化です。トルストイに『人にはどれほどの土地がいるか』という短編小説がありますが、ほんの少しの土地で足りるということです。

ここまでの8行は人柄の描写でした。次の8行は、他の人との関係でどういうことをするかという行為の描写です。

東ニ病気ノコドモアレバ
行ッテ看病シテヤリ
西ニツカレタ母アレバ
行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ
南ニ死ニサウナ人アレバ
行ッテコハガラナクテモイ、トイヒ
北ニケンクワヤソショウガアレバ
ツマラナイカラヤメロトイヒ

この東西南北は、仏教の四苦に対応しているかもしれませんが。四苦というのは、生老病死のことです。人は、若くても病気になり、歳をとれば疲れ、結局は死に、生きている間も欲に悩まされるのです。これが人間的現実です。それに対して賢治は、ただそういう人たちに出会うのではありません。「行ッテ」「行ッテ」「行ッテ」と自分から積極的に出かけて行って助けになろうとするのです。とはいうものの、どれほどの力になれるかは覚束ないのです。

ヒデリノトキハナミダヲナガシ
サムサノナツハオロオロアルキ

干ばつも怖いし、冷夏も怖い。そういう現実に対して人間は無力です。ここには少しの緊張関係があります。少し上では聡明な人間像を描いていたからです。聡明な人間であれば、日照りに対しても寒さに対しても対策を考えようとするだろうからです。水を引いてくる、ため池を造る、温室を作る、品種改良をするなどです。けれども賢治は、そういう賢い対策よりも、無力な人間に共感するのでしょうか。そういう人間ですから、決して偉人ではありません。

ミンナニデクノボートヨバレ
ホメラレモセズ
クニモサレズ

日照りや寒さに対策をとるのでもない、そういう意味でも欲がないのです。だから「デクノボー」と呼ばれるのです。おそらく、それで人間の生として十分だということです。

最後の2行が締めです。

サウイフモノニ
ワタシハナリタイ

もちろん賢治は農学者でした。農学者として農業を指導していたのです。おそらく、それも立派な生き方だったのでしょう。けれども賢治の理想は少し違っていただけです。農学者にデクノボー以上の価値があるわけではないという自覚があったのでしょ

う。「サウイフモノ」でなかったのが現実です。身体は弱く、欲はあり、人々から尊敬もされていたのでしょう。そういう現実を否定するところに、宗教的境地が成立しています。

おそらく、丈夫な身体をもち、頭も聡明で、医者になろう、弁護士になろう、農学者になろう、土木技師になろうというのも立派な理想的生き方でしょう。しかし、そういう生き方はすべて、現在の言葉で言えば、勝ち組の生き方です。そこに落とし穴があります。そういうところではなく、神様に近づく道は別のところにあります。「ナミダヲナガシ」「オロオロアルキ」人はどうするのでしょうか。神様に祈るのです。